

保育士・教員養成段階におけるキャリア形成支援 —インターンシップの効果的な実施方法を探る—

平井 敏孝
Toshitaka HIRAI

伊藤 孝子
Takako ITO

藤山 あやか
Ayaka TOYAMA

抄録：

本子ども学科では、「子どもや保育職・教職についての理解を深め、保育士や教諭としての実践力を養うために、幼稚園・保育所・認定こども園・小学校の現場での体験的な活動を行い、保育・教育実習や仕事に対しての心構えや意欲をもつこと」を目的に、本年度から1年生でインターンシップを実施した。インターンシップの成果として、第1に保育・教育実習や仕事に対しての心構えや意欲をもつことができたこと、第2に保育・教育実習に向けての課題の明確化につながったことが挙げられる。課題としては、インターンシップのさらなる効果を求めて、実施日数や期間、1日あたりの実施時間など、実施方法について検討する必要がある。本年度は、学生アンケートをもとにインターンシップの効果的な実施方法を探ったところであり、次年度の実施に生かすとともに、一層成果のあるものとするためにも、今後インターンシップを受け入れていただく学校園にもアンケートを実施し、「文教インターンシップ」がより互恵性のある教育活動になるよう取り組みをすすめたい。

キーワード： 保育者・教育者養成 学校インターンシップ 保育・教育実践力

1. はじめに

本学では、本年度から子ども学科1年生において、幼稚園・保育所・認定こども園・小学校へのインターンシップを実施した。このインターンシップの目的は、「子どもや保育職・教職についての理解を深め、保育士や教諭としての実践力を養うために、幼稚園・保育所・認定こども園・小学校の現場での体験的な活動を行い、保育・教育実習や仕事に対しての心構えや意欲をもつこと」である。

インターンシップの定義は、2015年（平成27年）12月10日一部改正された「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（三省合意）によると、「大学等におけるインターンシップ（以下、「インターンシップ」という。）とは、一般的には、学生が企業等において実習・研修的な就業体験をする制度のことである（中略）我が国においては、インターンシップについては、『学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと』として幅広くとらえられている」と示されている。本学でも、保育士や教員を目指す学生が、保育・教育現場で就業体験を行うことをインターンシップと捉え、学生のキャリア形成を図るために、本年度から実施することとし

た。

国の動向としては、1997年（平成9年）9月に、当時の文部省、通商産業省、労働省から「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（三省合意）が示され、これが、日本におけるインターン制度導入と言われている。その後、1999年（平成11年）12月に、当時の文部省から「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」の答申が出され、学校教育と職業生活の接続改善のための具体的方策として「キャリア教育」が登場し、インターンシップの促進等による体験的活動を重視すること等が求められた。

そして、2011年（平成23年）1月31日には、文部科学省から「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）が出され、幼児期の教育から高等教育までを通じたキャリア教育・職業教育の在り方が示された。

その後も、「産学連携によるインターンシップのあり方に関する調査報告書」（平成25年3月 経済産業省）

「インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について（意見の取りまとめ）」（平成25年8月 文部科学省）など、インターンシップの普及と推進に向けた方策が国の施策として実施されてきた（表1）。

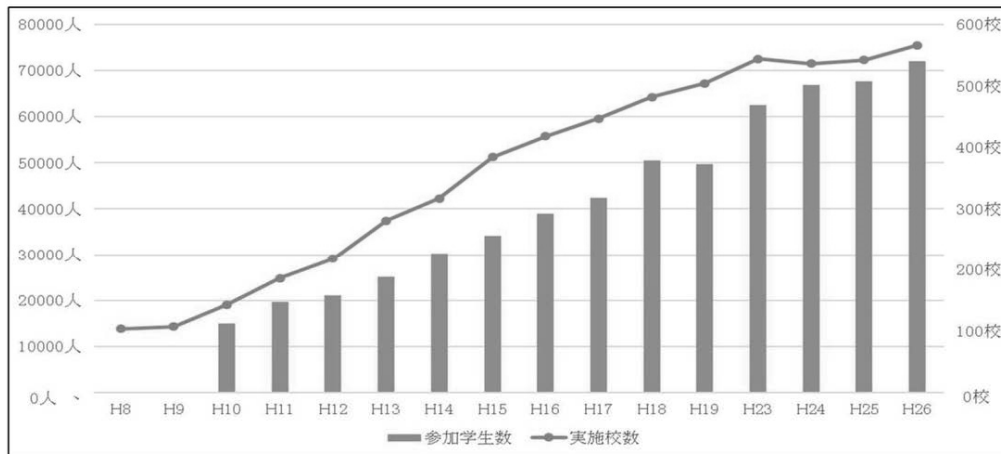
表1：インターンシップの普及及び推進にかかる国の動向

年 月	関係省庁	内 容
平成9年1月	文部省	「教育改革プログラム」 インターンシップを支援する取組を総合的に推進することが掲げられる
平成9年5月	閣議決定	「経済構造の変革と創造のための行動計画」 インターンシップの在り方について関係省庁において早急に検討を行うことが提言される
平成9年9月	文部省、通商産業省、労働省	「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（三省合意） 日本におけるインターン制度導入
平成11年12月	文部省	「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」（答申） キャリア教育の登場
平成21年7月	文部科学省	「インターンシップの導入と運用のための手引き」
平成23年1月	文部科学省	「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」
平成24年度	経済産業省	「産学連携によるインターンシップのあり方に関する調査」
平成24年度～ 26年度	文部科学省	「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」
平成25年3月	経済産業省	「産学連携によるインターンシップのあり方に関する調査報告書」 インターンシップの効果について
平成25年度	経済産業省	「教育的効果の高いインターンシップの普及に関する調査」
平成25年8月	文部科学省	「インターンシップの普及及び質的充実のための推進方策について（意見のとりまとめ）」
平成26年度	経済産業省	「共有型インターンシップの普及に関する調査」
平成26年度～ 27年度	文部科学省	「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業【テーマB】インターンシップ等の取組拡大」
平成26年4月	文部科学省、厚生労働省、経済産業省	「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方（一部改正）」（三省合意）
平成27年度	経済産業省	「インターンシップ等による産学協働教育のための連携基盤構築に関する調査」
平成27年6月	閣議決定	「日本再興戦略 改訂2015 ー未来への投資・生産性革命ー」 大学等におけるインターンシップの推進
平成27年12月	文部科学省、厚生労働省、経済産業省	「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方（一部改正）」（三省合意）
平成28年6月	閣議決定	「ニッポン一億総活躍プラン」 質的効果の高い多様なインターンシップの推進
平成28年6月	閣議決定	「まち・ひと・しごと創生基本方針2016」 「地方創生インターンシップ」を産官学で推進
平成29年6月	閣議決定	「インターンシップの更なる充実に向けて（議論の取りまとめ）」

- ・「インターンシップの基本的な考え方と政策等の変遷について」（平成29年10月31日）学生支援企画課キャリア教育室¹
- ・「インターンシップの更なる充実に向けて議論取りまとめ」（平成29年6月16日）インターンシップの推進等に関する調査研究協力者会議²より作成

図1: 大学(学部・大学院)におけるインターンシップ実施校数・参加学生数の推移
(平成8年度～平成26年度)

※単位認定を行うインターンシップであり、特定の資格取得に関係しないもの



	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H23	H24	H25	H26
実施校数	104校	107校	143校	186校	218校	281校	317校	384校	418校	447校	482校	504校	544校	536校	542校	566校
実施率	(17.7%)	(18.3%)	(23.7%)	(29.9%)	(33.5%)	(41.9%)	(46.3%)	(55.%)	(59.%)	(62.5%)	(65.8%)	(67.7%)	(70.5%)	(69.2%)	(69.8%)	(72.9%)
参加学生数	-	-	14,991人	19,650人	21,063人	25,063人	30,222人	34,125人	39,010人	42,454人	50,430人	49,726人	62,561人	66,818人	67,691人	72,053人
参加率	-	-	(0.6%)	(0.7%)	(0.8%)	(0.9%)	(1.1%)	(1.2%)	(1.4%)	(1.5%)	(1.8%)	(1.8%)	(2.2%)	(2.4%)	(2.4%)	(2.6%)

「インターンシップの更なる充実に向けて議論の取りまとめ」 平成29年6月16日インターンシップの推進等に関する調査研究協力者会議 より

表2: 平成29年度 大学等におけるインターンシップ実施状況 (文部科学省)

集計表

1. 単位認定を行うインターンシップと単位認定を行わないインターンシップの合計

(1) 学校数・割合

学校種別		学校数 (割合)	(参考) 平成27年度学校数 (割合)
大学	学部	671校 (89.0%)	713校 (94.1%)
	大学院	279校 (44.4%)	303校 (48.4%)
	小計	689校 (88.3%)	730校 (93.4%)
短期大学		270校 (80.1%)	300校 (87.5%)
高等専門学校		54校 (94.7%)	57校 (100%)
合計		1,013校 (86.3%)	1087校 (92.0%)

(2) 参加学生数・参加率

学校種別		参加学生数 (参加率)
大学	学部	640,444人 (24.8%)
	大学院	17,337人 (6.9%)
	小計	657,781人 (23.2%)
短期大学		112,688人 (90.9%)
高等専門学校		9,723人 (16.9%)
合計		780,192人 (25.9%)

参加学生数は、単位認定を行うインターンシップと単位認定を行わないインターンシップのいずれか又は両方に参加した学生の合計。

参加率は平成29年度学校基本調査における各学校種の学生数を基に算出。以下同じ。

参加学生数は延べ人数。以下同じ。

そうした中で、インターンシップを単位認定する大学等は、平成9年の三省合意から平成26年までに5倍以上に増加した(図1)。

直近の調査では、文部科学省が実施した「平成29年度大学等におけるインターンシップの実施状況について」³によると、「インターンシップ」を実施した短期大学は270校で、平成27年度300校と比較して30校減少したものの、短期大学全体の80.1%の大学で実施されている。そして、短期大学の参加学生数は112,688人、参加率は90.9%にもものぼる(表2)。この調査の結果を受けて、文部科学省は、インターンシップを学生が将来設計を考える機会として一層の推進・普及を提案している。

保育・教育現場におけるインターンシップについての先行研究は多い。インターンシップ実施の成果として、成田・森田(2009)は、「成果の第1は、学生の学びの深まりである。(中略)大学の講義での理解に加えて、現場で実際にかかわった子どもの様子から学生が自分で意味を導き出そうとする姿勢が育ってきたことは評価できる。(中略)成果の第2は、自分の保育観をもととする姿勢である。保育所では、学生はその場の一員として、子どもの行動に対して保育者がどういう対応をとるかを受け止め、学び取っている。」⁴と考察している。

広瀬(2013)は、「保育補助活動」は、「長期のインターンシップ」に類似するものであると述べ、保育補助活動は、本実習の事前指導として有効であるとして、「観察実習と違って、保育補助活動は、実際に子どもと関わる機会が保障されている故に、殆どの学生にとって、目の当たりにした実践知を、自ら実践し、体得する、ないし、しようとする姿勢を身に付け得るものである。保育補助活動を通じ、学生は子どもや保育者と積極的にコミュニケーションをとるために何が必要であるかを自分で考え、動くようになる。」⁵と考察している。

谷口・下里(2018)は、「インターンシップIによる効果の第1としては、学生の保育実習への期待を高めることである。(中略)第2としては将来の職業として、保育者は『かっこいい』と思い保育者になりたいという職業意識を高めることである。」⁶と考察している。

小学校へのインターンシップに関しては、渡邊他(2019)は、「この学校体験活動(学校インターンシップ)にあた

る観察実習科目をいち早く平成22(2010)年より教職課程科目「教育実習I」として設置し、運営してきた。大学が地域連携協定を結んでいる区域の小学校で履修する科目であり、大学2年次に観察実習を行うというものである。観察実習の成果として、将来希望する小学校教員という職業を知る良い機会であり、学校教育や教員志望意識に高まりが見られ、キャリアを方向付ける上でも効果があると報告されている(渡邊他2013)。」⁷と述べており、インターンシップは、学生のキャリア支援においても様々な教育的効果が期待できる。

そこで、本稿では、本年度子ども学科1年生で実施した「文教インターンシップ」の実施状況をもとに、保育士養成コース、小学校教諭養成コースにおけるインターンシップの意義と課題について考察し、本学における効果的な実施方法について検討する。アンケートの分析にあたっては、総数が少ないため、率に換算して傾向を述べる場合は、率そのものの信頼性は低いが、そのことを補完するために学生の聞き取りを行い、具体的な傾向の把握に努めた。

2. 「文教インターンシップ」の概要

(1) 目的

学生が子ども及び保育職・教職についての理解を深め、保育士や教諭としての実践力を養うために、幼稚園・保育所・認定こども園・小学校の現場での体験的な活動を充実させるとともに保育・教育実習を補完することを目的とする。

(2) 活動の期間及び時間

- ・6月から9月の4ヶ月間に16時間実施する。
- ・1回につき、2時間以上とする。
- ・1校園につき5時間以上実施する。

(3) 文教インターンシップの内容

文教インターンシップの内容は、受入学校園の管理監督下で、その指示により行うこととし、次の各号に挙げる内容とする。

- ①各教科・領域(特別活動、自立活動)・総合的な学習の時間等の授業・保育や活動への補助
- ②朝の学習や放課後等の時間における学習指導・保育への補助

- ③運動会・文化祭等、学校園行事への補助
- ④その他、学校園の保育・教育活動への補助

(4) 活動の制限

次の号に挙げる活動は行わないものとする。

- ①インターン生単独による各教科・領域（特別活動、自立活動）・総合的な学習の時間等の授業・保育や活動及び配慮を必要とする幼児や児童等への対応等

- ②水泳指導、クラブ活動等への指導

(5) 学生への報酬

文教インターンシップを履修する学生への報酬は、無報酬とする。また、文教インターンシップに伴う交通費、食費及びその他経費は、原則としてインターン生の負担とする。

(6) 受入学校園の決定

本学が指定する長浜市内の公私立学校園の中から、学生の希望により文教インターンシップを行いたい学校園を選び、それを基に本学で調整した後、本人が学校園で受入承諾書を受領し、本学に提出することで受入校園の決定とする。

(7) インターン生への支援

学生に文教インターンシップへの積極的な参加を促すとともに、円滑な実施に向けて事前説明会等の必要な支援を行う。文教インターンシップに係る指導教員は、受入学校園への訪問等を必要に応じて実施し支援を行うものとする。

3. 「文教インターンシップ」の実施状況

(1) アンケート調査の実施

- ①時期 事前アンケート：2019年5月
事後アンケート：2019年10月・12月
- ②対象 子ども学科1年生35名（内1名は事前アンケートのみ回答）
- ③回収率 100%

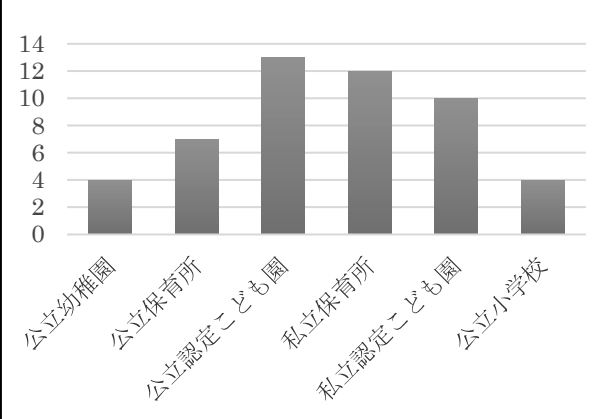
(2) アンケート結果

①事前アンケート（5月）

事前アンケートは、学生がインターン先を決めた直後の5月に実施した。

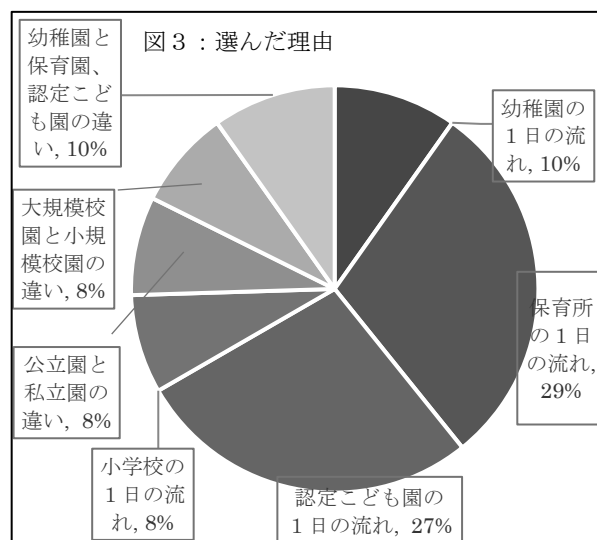
問1：あなたのインターンシップ先はどこですか。
（複数回答可）

図2：インターンシップ先



長浜市には、幼稚園9園（公立）、保育所12園（公立3園・私立9園）、認定こども園11園（公立8園・私立3園）、小学校26校（公立）があり、学生は交通の便などの立地条件も考えてインターンシップ先を選んでいる。

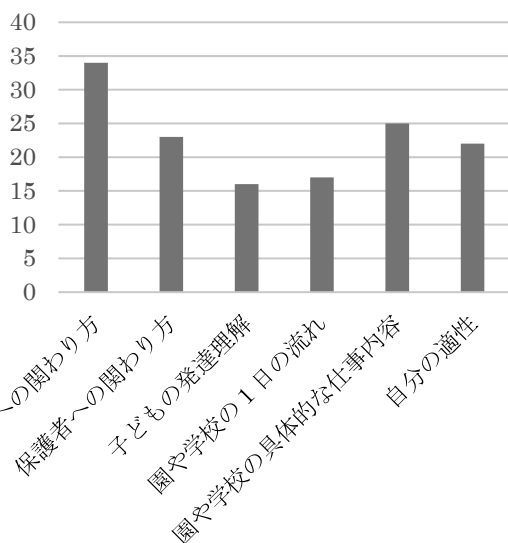
問2：あなたがインターン先を選んだ理由は何ですか。（複数回答可）



インターンシップ先を選んだ理由を尋ねたところ、学校や園の1日の流れを知りたいと答えた学生が74%であった。また、学生が選んだ学校園数は、1校園が12人、2校園が23人で、ほぼ1/3の学生が複数の学校園でインターンシップを経験したいと考えている。

問3：あなたはインターンシップで何を学びたいですか。（複数回答可）

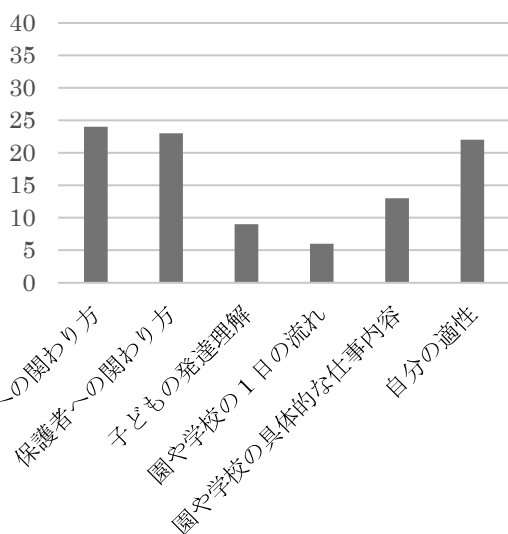
図4：何を学ぶか



学生の97.1%が、インターンシップを通して子どもへの関わり方を学びたいと考えている。続いて多いのが園や学校の具体的な仕事内容（71.4%）、保護者への関わり方（65.7%）、自分の適性（62.9%）である。

問4：インターンシップに行くうえで、不安に思うことはありますか。（複数回答可）

図5：不安に思うこと



インターンシップの際に、学生が一番不安に感じていることは、子どもへの関わり方である。次いで、保護者への関わり方、自分の適性への不安が高い。アンケートの実施が入学後間もない5月で、保育・教育内容等について十分学んでいない時期のために、上記の不安が高いと考える。

②事後アンケート（10月・12月）

事後アンケートは、対象のすべての学生がインターンシップを終了した10月と、保育実習を目前に控えた12月（インターンシップで学んだことと、保育・教育実習で学びたいことを5件法により選択）に実施した。

問1：あなたはインターンシップで何を学びましたか。（複数回答可）

インターンシップを経験したすべての学生が、子どもへの関わり方を学んだと回答した。続いて多いのが、園や学校の1日の流れ（55.9%）、園や学校の具体的な仕事内容（52.9%）、子どもの発達理解（41.2%）であった（図6）。そこで、さらに、学んだ程度を5件法で尋ねた（図7）。

図6：学んだこと

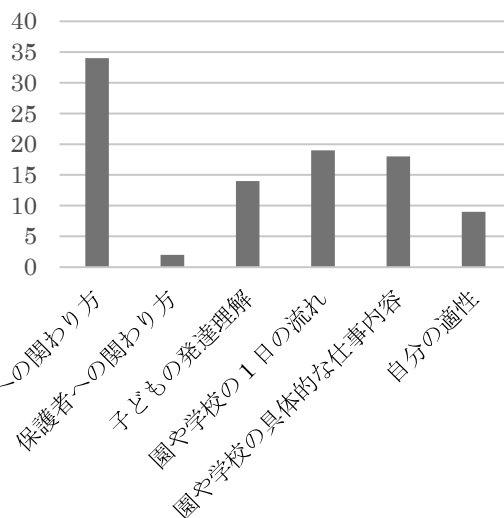


図7：学んだこと2

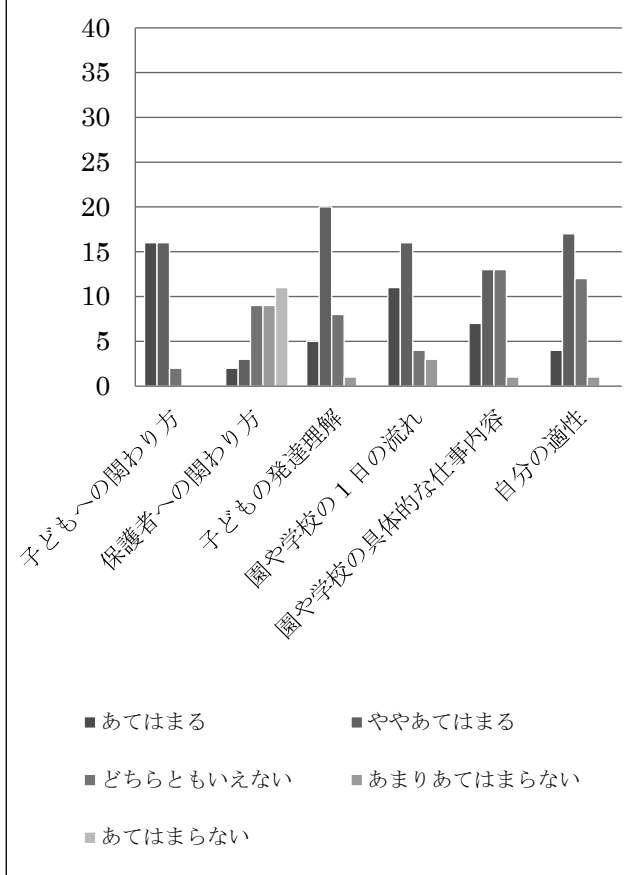
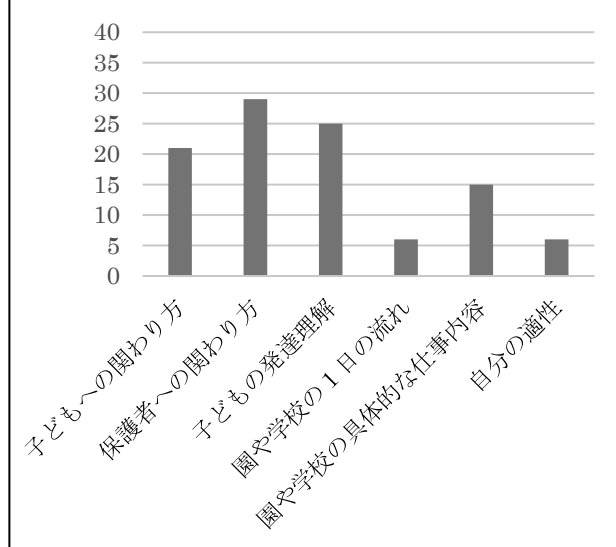


図8：今後さらに学びたいこと



インターンシップを終えて、さらに学びたいことを尋ねたところ、一番多かった回答が保護者への関わり方（85.3%）である。続いて子どもの発達理解（73.5%）、子どもへの関わり方（61.8%）であった。

そして、図4・図6・図8をまとめたグラフが図9である。

5件法によるアンケートは、保育実習前の12月に実施したため、10月時点とは意識の変化が若干あるものの、子どもへの関わり方については、「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した学生はともに47.1%、子どもの発達理解については、「あてはまる」14.7%、「ややあてはまる」58.8%、園や学校の1日の流れについては、「あてはまる」32.4%「ややあてはまる」47.1%、園や学校の具体的な仕事内容については、「あてはまる」20.6%、「ややあてはまる」38.2%であった。

問2：あなたはインターンシップを終えて、今後さらに学びたいことは何ですか。（複数回答可）

図9：インターンシップでの学びの変容

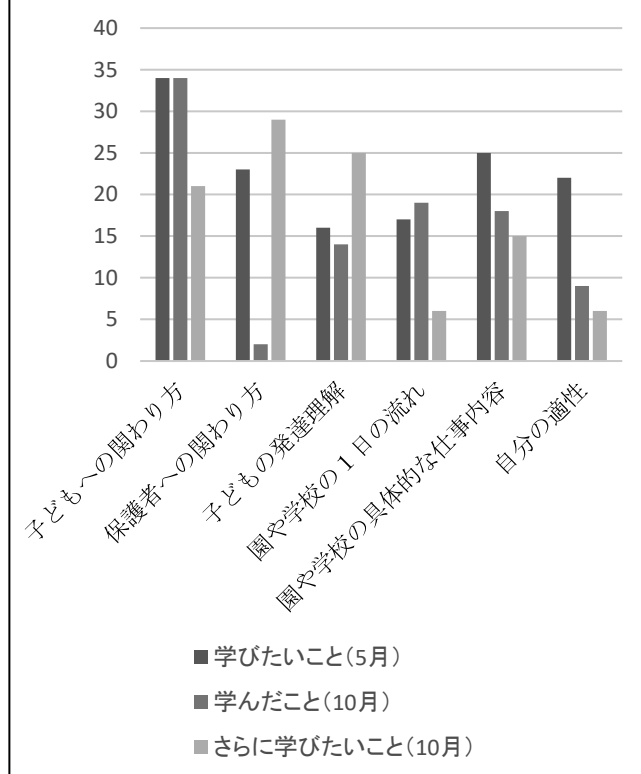


図9を見ると、インターンシップ前に子どもへの関わり方を学びたいと考え、インターンシップで子どもへの関わり方を学んだと感じている学生は、今後さらに学びたいことが別の課題に変わったといえる。また、園や学校の1日の流れ、園や学校の具体的な仕事内容、自分の適性についても、5月の時点で学びたいと考えていたことが、インターンシップで解決し、今後さらに学びたいことでは減少したことが伺える。しかし、保護者への関わり方、子どもの発達理解については、インターンシップで十分な学びにまで至らず、今後さらに学びたいこととして、学生の課題意識につながったと考える。

(3) アンケートのクロス集計

① 体験した校園数による学びの違い

学生が選択したインターンシップ先は、1校園か2校園であった。体験した校園数による学びの違いを項目別に表したのが図10である。これは、図7を校園数によってクロス集計したものである。

インターンシップ先が1校園でも2校園でも、子どもへの関わり方、保護者への関わり方、子どもの発達理解、自分の適性については、大きな差異は認められなかった。しかし、園や学校の1日の流れでは、「あてはまる」と回答した学生の割合が1校園では9.1%、2校園では43.5%、園や学校の具体的な仕事内容では、「あてはまる」と回答した学生が1校園では9.1%、2校園では26.1%であった。園や学校の様子を知るには、複数のインターンシップ先を経験する方が、学びがより広がるといえる。

図10：校園数による学びの違い

(人)

① 子どもへの関わり方を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらな	あてはまらな	総計
1園	5	5	1	0	0	11
2園	11	11	1	0	0	23
総計	16	16	2	0	0	34

② 保護者への関わり方を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらな	あてはまらな	総計
1園	1	1	1	4	4	11
2園	1	2	8	5	7	23
総計	2	3	9	9	11	34

③ 子どもの発達理解を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらな	あてはまらな	総計
1園	1	7	2	1	0	11
2園	4	13	6	0	0	23
総計	5	20	8	1	0	34

④ 園や学校の1日の流れを学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらな	あてはまらな	総計
1園	1	7	2	1	0	11
2園	10	9	2	2	0	23
総計	11	16	4	3	0	34

⑤ 園や学校の具体的な仕事内容を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらな	あてはまらな	総計
1園	1	5	5	0	0	11
2園	6	8	8	1	0	23
総計	7	13	13	1	0	34

⑥ 自分の適性（保育士や教諭に向いているか）を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらな	あてはまらな	総計
1園	1	5	5	0	0	11
2園	3	12	7	1	0	23
総計	4	17	12	1	0	34

②体験した日数による学びの違い

学生は、インターンシップ全16時間を、自分の都合に合わせて実施している。そのため、インターンシップを体験する日数は学生によって、2日から6日であった。

体験した日数による学びの違いをクロス集計したものが、図11である。こちらも図10同様に処理をした。

(注：6日間体験した学生は2名のため、比較検討の対象から除く)

子どもへの関わり方では、「あてはまる」と回答した学生の割合は、2日61.5%、3日37.5%、4日36.4%であった。また、保護者への関わり方で「あてはまる」と回答した学生は、2日15.4%、3日0.0%、4日0.0%であった。そして、子どもの発達理解については「あてはまる」と回答した学生は、2日23.1%、3日12.5%、4日9.1%であった。

子どもへの関わり方、保護者への関わり方、子どもの発達理解においては、1日8時間で2日間インターンシップを体験したことで、学びを深めた学生が多かった。

さらに、園や学校の1日の流れ、園や学校の具体的な仕事内容、自分の適性では、「あてはまる」の回答でばらつきがあるものの、「あてはまる」「ややあてはまる」を合わせると、いずれも1日8時間で2日間インターンシップを体験した学生は、それぞれの項目で学びを深めたと捉えることができる。

1日8時間インターンシップを体験することで、園や学校の1日の流れがわかり、保育士や教員の子どもや保護者との関わり等を知ることができるなど、保育・教育の基本を学ぶことにつながると考える。

図11：日数による学びの違い

(人)

① 子どもへの関わり方を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらな	あてはまらな	総計
2日	8	5	0	0	0	13
3日	3	4	1	0	0	8
4日	4	7	0	0	0	11
6日	1	0	1	0	0	2
総計	16	16	2	0	0	34

② 保護者への関わり方を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらな	あてはまらな	総計
2日	2	1	3	5	2	13
3日	0	1	0	4	3	8
4日	0	1	6	0	4	11
6日	0	0	0	0	2	2
総計	2	3	9	9	11	34

③ 子どもの発達理解を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえな	あまりあてはまらな	あてはまらな	総計
2日	3	5	5	0	0	13
3日	1	4	2	1	0	8
4日	1	9	1	0	0	11
6日	0	2	0	0	0	2
総計	5	20	8	1	0	34

④ 園や学校の1日の流れを学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえぬ	あまりあてはまらない	あてはまらない	総計
2日	6	6	0	1	0	13
3日	1	5	2	0	0	8
4日	4	4	2	1	0	11
6日	0	1	0	1	0	2
総計	11	16	4	3	0	34

⑤ 園や学校の具体的な仕事内容を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえぬ	あまりあてはまらない	あてはまらない	総計
2日	3	6	4	0	0	13
3日	1	4	3	0	0	8
4日	3	3	5	0	0	11
6日	0	0	1	1	0	2
総計	7	13	13	1	0	34

⑥ 自分の適性(保育士や教諭に向いているか)を学んだ						
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえぬ	あまりあてはまらない	あてはまらない	総計
2日	3	7	3	0	0	13
3日	0	5	3	0	0	8
4日	1	4	5	1	0	11
6日	0	1	1	0	0	2
総計	4	17	12	1	0	34

4. 考察

(1) インターンシップの成果

インターンシップの成果として、第1に、保育・教育実習や仕事に対しての心構えや意欲をもつ機会になった。インターンシップ実施前に学びたいこととして、子どもとの

触れ合いを通して子どもへの関わり方を学びたいと考えていた学生(97.1%)全員が、インターンシップを体験して子どもへの関わり方を学ぶことができた。また、園や学校の1日の流れ、園や学校の具体的な仕事内容を知ることができ、保育士や教諭という仕事への適性についても、インターンシップである程度理解ができたといえる(図12、図13)。

図12: 保育士や教諭に向いていると思いますか (人)

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
事前(5月)	4	22	9	0
事後(10月)	5	21	6	2

図13: 保育士や教諭になりたいですか (人)

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
事前(5月)	27	8	0	0
事後(10月)	23	9	2	0

そして、第2は、学生自身が保育・教育実習に向けての課題を明確にもつことができたようになったことである。インターンシップで十分に課題解決ができなかった、保護者への関わり方や子どもの発達理解については、今後さらに学びたい課題として、多くの学生が挙げている。

保育士養成コースの学生は、1月下旬から保育実習が始まる。その保育実習の課題として、「インターンシップでは子どもと遊ぶことはできたが、子どもへの指導の仕方がわからなかったので、保育実習では子どもの状況に応じた保育者の援助についてしっかりと学びたい」と記述している。

これらの姿は、インターンシップの経験を踏まえて保育実習の課題を設定するなど、自らの課題の明確化につながっているといえる。

第3の成果としては、インターンシップで学生が学べることと、学びにくいことが整理できたことである。学生が

インターンシップを体験する時間は16時間ではあるが、その中で学生は子どもへの関わり方や園や学校の1日の流れを学ぶことができた。また、実施形態としては、1日8時間の体験をすること、2校園以上の体験をすることが効果的であることがわかった。特に、1日8時間を2日間インターンシップに行った学生13人中12人が、体験前に園や学校の1日の流れを学びたいと回答し、そのうち11人が学べたと回答した一方、4日間インターンシップに行った学生では、11人中10人が体験前に園や学校の1日の流れを学びたいと回答し、そのうち7人が学べたと回答したという結果もあり、学生が学びたいことに応じて効果的な日数や時間があることがわかった。これらは、次年度の学生に伝えていきたい。

本年度、初めてインターンシップを実施し、学生が保育者・教育者を目指すにあたって、主体的に学び、また学び方を考える機会として有効であることが明らかになった。

(2) 今後の課題

インターンシップの実施方法については、さらなる効果を求めて、実施日数や期間、1日あたりの実施時間などについて検討する必要がある。

本学のインターンシップは、本学が指定する地域の学校園から、学生がそれぞれの課題に応じて、実施校園を選ぶ。実施条件としては、6月から9月に合計16時間、1校園につき5時間以上、1回あたり2時間以上という実施期間及び時間を決めている。そのため、学生が経験する校園数は1～3校園、実施回数は2～8回となる。

学生は、公立園と私立園の違いや、幼稚園・保育所・認定こども園の違い、学校園の規模による違いなど、それぞれの課題に応じて実施校園を決めた。平日は授業でほぼ空き時間のない保育士養成コースの学生は、土曜日にインターンシップを体験した学生が多かった。

土曜日のインターンシップは、登園している子どもの数が少ない。そのため、異年齢保育が行われている園も多く、学生の学びは様々であった。土曜日にインターンシップを体験した学生に聞き取りをした結果、次のような意見があった。

・少人数の保育であったため、通常の保育での1日の流れがわからなかった。

・少人数の子どもと触れ合うだけに終わってしまった。
・1つのクラスだけでなく、異年齢の子どもたちに関わることができたので、子どもの発達理解が深まった。

また、受け入れ校園に、インターンシップについての意見や感想を尋ねたところ、次のような意見があった。

・インターンシップで子どもと関わるには、午前中のほうがよい。
・授業の関係だと思うが、夕方2時間インターンシップに来た学生は、降園時間で子どもとあまり関われなかった。
・1日8時間で2日間インターンシップに来た学生は、園の1日の流れや保育士の仕事など学びが大きかったと思う。2日間であっても、子どもたちは学生のことをよく覚えている。

こうした意見も踏まえ、次年度のインターンシップガイドダンスでは、土曜日のインターンシップのよさと課題等についても学生に伝えたい。そして、夕方2時間のインターンシップは避けるなど、実施方法を検討したい。

5. おわりに

本年度、本学が初めて実施したインターンシップにおいて、参加学生は、子どもや教職・保育職についての理解を深め、保育・教育実習や仕事に対しての心構えや意欲をもつきっかけとなった。次年度以降も「文教インターンシップ」を継続する中で、インターンシップの効果を検証し、現在の条件でのよりよい方策やあり方を探るとともに、正規の教育課程としての位置づけについても検討を重ねたい。

インターンシップの推進等に関する調査研究協力者会議による「インターンシップの更なる充実に向けて議論の取りまとめ」（平成29年6月16日）では、

○正規の教育課程としてのインターンシップに必要な要素としては、以下が考えられる。

- ①就業体験を伴うものであること
- ②大学等において、正規の教育課程の中に明確に位置付けられた授業科目であること（大学設置基準等に基づく単位認定がなされていること）
- ③実習の事前に学生・企業双方との目標設定や目的のすり合わせを行うことや、実習期間中にモニタリングを行うこと、事後に振り返りを行うことなどを含めて適

- 切な学生指導の時間が設けられていること
- ④実施後の教育的効果を測定する仕組みが整備されていること
- ⑤原則として実習期間が5日間以上のプログラムであること
- ⑥大学等と企業が協働して行う取組であること
- と、示されている。そこには、「⑤原則として実習期間が5日間以上のプログラムであること」とあり、実施期間も含めた検討が今後必要となるだろう。

また、本年度は、参加学生のアンケートにとどまり、受け入れ学校園へは園長会等で意見を聞いただけで、アンケートまでは実施しなかった。次年度は、参加学生へのアンケートの蓄積を行うとともに、インターンシップを受け入れていただく協力校園にもアンケートを実施し、「文教インターンシップ」がより互恵性のある教育活動になるよう取り組みをすすめたい。

<引用：参考文献>

- 1 文部科学省学生支援企画課キャリア教育室「インターンシップの基本的な考え方と政策等の変遷について」（平成29年10月31日）
https://www.jasso.go.jp/gakusei/career/internship/seisaku/_icsFiles/afielddfile/2017/11/02/jasso_hebsebl.pdf (2020年1月10日確認)
- 2 インターンシップの推進等に関する調査研究協力者会議「インターンシップの更なる充実に向けて議論の取りまとめ」（平成29年6月16日）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/076/gaiyou/_icsFiles/afielddfile/2017/06/16/1386864_001_1.pdf (2020年1月10日確認)
- 3 文部科学省「平成29年度 大学等におけるインターンシップ実施状況」
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afielddfile/2019/02/27/1413928_02_1.pdf
(2020年1月10日確認)
- 4 成田信子、森田健（2009）「教育保育インターンシップⅡの現状と課題 ―保育所・幼稚園の場合―」『関西国際大学研究紀要第10号』 pp. 27-39
- 5 広瀬健一郎（2013）「正統的周辺参加学習」モデルによる保育実践力涵養の取組み：一年次学生に対する「保育補助活動」の意義と成果『鹿児島純心女子大学国際人間学部紀要第19号』 pp. 15-38
- 6 谷ロー也、下里里枝（2018）「就学前保育・教育施設へのインターンシップの効果と課題(2) 大学1年生のインターンシップの場合」『関西国際大学教育総合研究所教育総合研究叢書第11号』 pp. 147-157
- 7 藤谷哲、峯村恒平、枝元香菜子、渡邊はるか、山本礼二（2019）「教師教育に関する近年の動向と政策」『目白大学 総合科学研究第15号』 pp. 111-115

平井 敏孝 子ども学科准教授・教科教育学
伊藤 孝子 子ども学科講師・教科教育学
藤山あやか 子ども学科講師・教科教育学